

ごん吉くんしポート、南吉よもやま話

第8回

児童文学者と故郷②

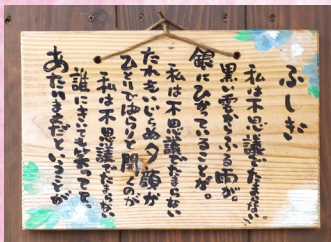
金子みすゞ



児童文学者の故郷のまちが、作家の顕彰にどう取り組んでいるのかをご紹介します。二回目。宮沢賢治に続く今回は、童謡詩人、金子みすゞの例を見てみましょう。

金子みすゞは、明治36年、現在の山口県長門市仙崎に生まれます。二十歳のとき、投稿した四つの雑誌すべてに作品が掲載されるという鮮烈なデビューを果たします。ところが、自由に創作ができたのはわずか数年。夫に創作を禁じられ、昭和5年、26歳の若さで自ら命を絶つてしまいました。

その後、みすゞは人々の記憶から次第に消えてしまいました。みすゞが再び注目されるのは、彼女の「大漁」という詩に感動した詩人の矢崎節夫さんが遺族を探しだし、預かった三冊の遺稿集を出版した昭和59年以降のことです。あらゆるものに命を見出して慈しむその詩は、瞬



く間に共感を呼び、劇的な廻りを果たします。代表作「私と小鳥と鈴と」の「みんなちがって、みんないい」のフレーズは皆さんもよくご存知です。作品が教科書に載り、ドラマや映画にもなり、まさに「みすゞブー

ム」が巻き起こります。金子みすゞ記念館では、地元の保育園児たちが来てみすゞの童謡を歌うミニコンサートが毎月行われているよ。

ム」が巻き起こります。

そして、生誕百年の平成15年には実家跡に金子みすゞ記念館が開館。実家が経営していた書店も復元され、小さな漁村の仙崎地区には全国から観光客が押し寄せました。そんななか立ち上がったのが、地元の若者たちでした。特産品の蒲鉾の板を用いたモザイクアートやみすゞの詩全五十二編のリーフレットなど、工夫を凝らしてみすゞの世界に親しむ活動を続けています。

こうした取り組みで陥りやすいのが、作家を利用するだけの町おこしになってしまうことです。しかし、仙崎では「町おこしより心おこし」を合言葉に、安易な観光利用はせず、みすゞの心を受け継ぐことを大切にしています。

仙崎駅を降りて、記念館に向かって伸びる「みすゞ通り」を歩くと、ほとんどの家の軒先に、手書きでみすゞの詩や絵を描いた木の札（写真）が下げられています。多くの地方都市と同じく人口減少に悩む長門市ですが、みすゞという存在は、市民の誇りと子どもたちの豊かな心を育む力になっているのです。

まちがどVoice

Q

新庁舎が完成して、レストランができたと聞きましたが、私たち市民も利用することはできますか？

A

はい、ご利用いただけます。レストラン「リコリス」は、新庁舎1階にあり、健康に配慮したバランスの取れたお料理を日替わりでご用意しています。ラーメンなどの麺類は400円から、日替りランチ、ヘルシーランチ、週替りの醸す丼は700円でご賞味いただけます。モーニング（飲み物+100円）やデザートなどもご用意しています。ぜひご利用ください。

営業時間 ●モーニング：8時30分～11時 ●ランチ：11時～14時 ●軽食：14時～17時
（土日、祝日休み。水曜日のみ19時まで営業）

